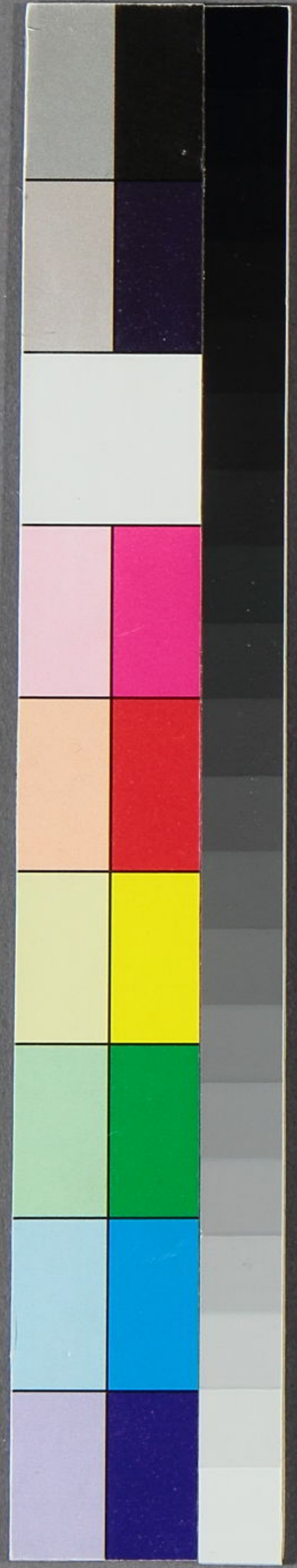


八代集抄

後拾遺集上下巻

二十三

特別
イ 4
3163
104(23)



つげしきうしきと
いふ物也
ちうこの秋くさう
思きりて扇を
近く掛らすは
乃冷やうきさ
い左今の身より
一とせ乃さう
今一夜をぬく
まらぬ切り
いさきくさう
ねねよと庚申の
二戸さし
申小舟中
すすめ

ちう乃秋くさう
あしき何事乃
七月八日
一とせ乃さう
こよひ
七月七日庚申
よよめ
大江作
いさきくさう
ねねよと
七月七日
小舟

ねねとさう
あしき何事乃
いさきくさう
ねねよと
麻ひき織女
い麻草
解といふ
さう
憶牛女
女の
いさき
くさう
えつ

いさきくさう
七月七日
一人
憶牛女
堀河
七夕
七月七日
上総乳女
朱蓮院

唐詩のしよの華中を
 逢東の野にありては
 うらまひしん
 わこれか入ふせりや
 彼人よ一帯と馬わ
 早に心うつし
 主人うたせせり
 ありては
 かくれぬ事くすまは
 とる。いそぎあめ
 うらまひしん
 の逢東の野にありては
 居易初到香山心
 居易の白果てり
 白氏文集六十六云ク

わこれか入ふせりや
 彼人よ一帯と馬わ
 早に心うつし
 主人うたせせり
 ありては
 かくれぬ事くすまは
 とる。いそぎあめ
 うらまひしん
 の逢東の野にありては
 居易初到香山心
 居易の白果てり
 白氏文集六十六云ク

初入香山院對月
 老住香山初到夜
 秋逢白月正炎時
 從今便是家山月
 試問清光知不知
 いそぎあめ
 うらまひしん
 こころは
 よりすめ
 三男此試問
 心うつし
 わこれか入ふせりや
 彼人よ一帯と馬わ

いそぎあめ
 うらまひしん
 こころは
 よりすめ
 三男此試問
 心うつし
 わこれか入ふせりや
 彼人よ一帯と馬わ

近中將公實

居易初到香山心
 居易の白果てり
 白氏文集六十六云ク

人小訪事これにお
ひとも月出り
る秋の月
秋の月
も明の月の
いづれ我も月
出くまのれの家
もつての月
ふりうく世を
この黄河乃
丁の月
乃きつる
拾遺記
ふ世の
ありし

大対の巻
秋乃月
我も
二条太政大臣
お裁極
撰ひ
小松を
ふりあ
ひりさ
土御門
乃きつる
拾遺記
ふ世の
ありし

辰抄四四

大政大臣
てそ
さ
あ
心
河原院
乃
乃
量
あ
に
つ
身
身
と

秋乃月
お
ま
河原院
あ
し
く
影
身
山

フモンカ

肥後権守教舒

我結くも心のあき
も結くをれはこころ
かりわれはあき
ひらくも

よきあきし一雪の上
花人の鼻殿をれは
も地下さりし
能くよせし一雪上
よきも秋月のあ
くす

いづもるる月と
わく秋月の他時
こころはつら
なうさるるやと
こころあきそ

花人^{大徳し}うあきく乃秋南殿の月を
もくあきし

源道深

よきあきし一雪の上
秋の月よりいづもるる
寛和元年八月十日内裏舟合

よきあきし 花原も終

いづもるる月と
伊あきし
八月の月を

舟乃風待と

すむもくもつ世も
いづもるる月の上
下心の世人のあきぬ
一せしは葉向あき
こわれも

唐沢 遍昭寺

基後戻目抄云人の遍昭寺の月見侍るるよき中よ花永初長
引す人よきあきし一舟乃懐の草葉を中納まはれとて云は出
葉もくあきぬいづもるる乃春谷といふ所へはせよやれりなれを花
永永とほく

お大納も

すむもくもつ世も
くもるる月の上
唐沢乃月を

いづもるる月と

唐沢乃月を

出れしつらくくもは荒原國の權しつらくくもは荒原國を乞ふて瑞乃
感う入靈あも〜と首つらくくもは荒原國を乞ふて瑞乃
とあら

山里つらくくもは荒原國を乞ふて瑞乃
とあら

とあら

とあら

荒原國行 諸國以 内進乃有歌子

とあら

とあら

とあら

いふ一月月かじせハ
彼得は若くも務け
古乃月れ〜つらくくも
只登と月くのみぬ
昔様神の神いぬぬ
けん〜とあら

惟宗為經 ツ平大陽行列子 刑ア新筆

いふ一月月かじせハ

神い〜とあら

橋の右大臣 ねま

とあら

秋のあ〜とあら

荒原陸城 從五位下

とあら

とあら

赤染門

今もあつて母の心もあつた
 人かたの心もあつた
 せうもあつた
 せんく種々の真ある
 へられたる赤染家集三
 詞をよみよみてあつた
 ぬ人なりよみてあつた
 萩の娘の心もあつた
 せんく種々の真ある
 されとい集三のあつた
 の奇よよみてあつた
 かん人なりよみてあつた
 秋の秋といよみてあつた
 け昇次の節の節よ

今もあつて母の心もあつた
 人かたの心もあつた
 せうもあつた
 せんく種々の真ある
 へられたる赤染家集三
 詞をよみよみてあつた
 ぬ人なりよみてあつた
 萩の娘の心もあつた
 せんく種々の真ある
 されとい集三のあつた
 の奇よよみてあつた
 かん人なりよみてあつた
 秋の秋といよみてあつた
 け昇次の節の節よ

清原元補

今もあつて母の心もあつた
 人かたの心もあつた
 せうもあつた
 せんく種々の真ある
 へられたる赤染家集三
 詞をよみよみてあつた
 ぬ人なりよみてあつた
 萩の娘の心もあつた
 せんく種々の真ある
 されとい集三のあつた
 の奇よよみてあつた
 かん人なりよみてあつた
 秋の秋といよみてあつた
 け昇次の節の節よ

今もあつて母の心もあつた
 人かたの心もあつた
 せうもあつた
 せんく種々の真ある
 へられたる赤染家集三
 詞をよみよみてあつた
 ぬ人なりよみてあつた
 萩の娘の心もあつた
 せんく種々の真ある
 されとい集三のあつた
 の奇よよみてあつた
 かん人なりよみてあつた
 秋の秋といよみてあつた
 け昇次の節の節よ

前大納言

いかにわらわしむしむし一筆を引終去乃名よ替て舞の終はせりとの
と一なる秋もはつと

古りやうに秋後と

り秋の強くはつと

いかにわらわしむしむし

は遠くも古里を

こころのうつろひ

長恨の文集十二巻

とよのあつとつて

長恨歌云ゆほ地死皆

依舊又云西宮南苑

秋草と皆揚貴

妃あまの世のまゝ

つとつとつとつと

云宗乃ちあつと

あ

四葉中

廉義の女
女代明教の女

いかにわらわしむしむし

わらわしむしむし

長恨の文集十二巻

とよのあつとつて

けいせい

道念法師

つとつとつとつと

長すつとつとつと

平兼盛

いかにわらわしむしむし

わらわしむしむし

大江匡衡朝臣

大承天寺重光

秋風りこゑより

はなまはつとつと

うねのうら

あけやちあちあち

すまひつとつと

寛和元年八月十日内裏拜合

よめり長恨の文集
つとつとつとつと
秋のよめりつとつと
いかにわらわしむしむし

長恨の文集十二巻

とよのあつとつて

長恨歌云ゆほ地死皆

依舊又云西宮南苑

秋草と皆揚貴

妃あまの世のまゝ

つとつとつとつと

云宗乃ちあつと

いかにわらわしむしむし

古りやうに秋後と

り秋の強くはつと

いかにわらわしむしむし

おきもわねわ、
居の常世を我病床
しきく病臥歎
おきもわねわ、
居の常世を我病床
しきく病臥歎

おきもわねわ、
居の常世を我病床
しきく病臥歎
おきもわねわ、
居の常世を我病床
しきく病臥歎

おきもわねわ、
居の常世を我病床
しきく病臥歎
おきもわねわ、
居の常世を我病床
しきく病臥歎

おきもわねわ、
居の常世を我病床
しきく病臥歎
おきもわねわ、
居の常世を我病床
しきく病臥歎

秋乃月の氣乃

うつりてちひさくま

くもやうのさゆ

るくし葉葉かやうと

粒のふくもこのもいあ

はるまひまへはれもこ

みちのこれあてり乃

安達八七おちの歌

お乃名こいゆをな

まこくちうましんま

もろ月乃こまひく時

ちかひ信濃の粒の名

也ち月とつたあつ

周もやうのふらば

経林ち元亨尺書云釋

源縁法師

みちのくろあてり乃こまひく時

くもやうのさゆ

るくし葉葉かやうと

粒のふくもこのもいあ

はるまひまへはれもこ

みちのこれあてり乃

安達八七おちの歌

お乃名こいゆをな

まこくちうましんま

源縁法師

前漢のち 持信堂 権文子

真紹初事江は天師長

受灌頂干實惠秋衡

之間建禪林寺

これゆけのあてり乃

秋乃夕乃出のぬ鹿乃

志元集つて山家秋衡

志乃乃ぬよ秋をとる

い并乃乃るか尾上も能

名正也只山ののしん

明くけ作者涼古今集

の電又准きては人称毫

凡と通像で自歎云袋

かひもあまのちうすれ

秋乃の比し鹿乃五

まこくちうましんま

これゆけのあてり乃

あてり乃こまひく時

くもやうのさゆ

るくし葉葉かやうと

粒のふくもこのもいあ

はるまひまへはれもこ

みちのこれあてり乃

安達八七おちの歌

お乃名こいゆをな

まこくちうましんま

源縁法師

前漢のち 持信堂 権文子

まじりてはるる
からんまじりて
裁りてはるる

枯葉乃りしりし
さくわさくわさく
乃りしりしりし
中よりうらやあ
のりしりしりし
うらやあさく
と鹿の事とて
あまの秋をさく

しりしりしりし
山里の鹿とて
大中居徳宣朝臣

枯葉乃りしりし
うらやあさく
おしりしりしりし
く
源有善朝臣
あまの秋をさく
わさくわさく
安法法師

正徳十一年

あまの秋をさく
中よりうらやあ
のりしりしりし
うらやあさく
と鹿の事とて
あまの秋をさく

あまの秋をさく
中よりうらやあ
のりしりしりし
うらやあさく
と鹿の事とて
あまの秋をさく

多摩野の書
乃とあいの小枝露
とりのけは物
秋芳乃とれせね業
心明

志乃乃ねう孫とめ
その草や一小節
草亦也鹿乃す心節
べが草のさる心又
一統草も鹿乃す心

多摩野の書
とりのけは物
秋子内親の家并合
大正二位

秋芳乃とれせね
心明

叔原家經

志乃乃ねう孫とめ
その草や一鹿や

江竹屋
大正国衛女
母赤澤忠

不審士

志乃乃ねう孫とめ
小倉をうきま
うてなれ復た
これとの子物
心乃晴
也古金屋
乃秋夢
いつま
さ
老年の
命
い

志乃乃ねう孫とめ
は
これとの子物
ら
天台
の
や
物
より

伊勢大権

おまわり一えは
けふのま物や
まはるはまはる
まはるはまはる
まはるはまはる
まはるはまはる
まはるはまはる
まはるはまはる
まはるはまはる
まはるはまはる

おまわり一えは
けふのま物や
まはるはまはる
まはるはまはる
まはるはまはる
まはるはまはる
まはるはまはる
まはるはまはる
まはるはまはる
まはるはまはる

辰拾四十二

おまわり一えは
けふのま物や
まはるはまはる
まはるはまはる
まはるはまはる
まはるはまはる
まはるはまはる
まはるはまはる
まはるはまはる
まはるはまはる

おまわり一えは
けふのま物や
まはるはまはる
まはるはまはる
まはるはまはる
まはるはまはる
まはるはまはる
まはるはまはる
まはるはまはる
まはるはまはる

やまへんしちやふ葉

剣さねのすねのまゝあ

らすまゝ乃野のりし

の萩のすねのりし

萩のまゝのりし

すねのりし

これ野乃萩代萩乃

萩乃れれれれれれれ

素意法師

これ野乃萩の萩乃りし

の萩のすねのりし

萩のまゝのりし

すねのりし

これ野乃萩代萩乃

萩乃れれれれれれれ

神事ハ六病ハ

神事ハ六病ハ

神事ハ六病ハ

神事ハ六病ハ

神事ハ六病ハ

神事ハ六病ハ

神事ハ六病ハ

神事ハ六病ハ

良選法師

神事ハ六病ハ

神事ハ六病ハ

神事ハ六病ハ

神事ハ六病ハ

神事ハ六病ハ

神事ハ六病ハ

神事ハ六病ハ

らんてんてんてんてん

おのののののののの

一かゝるものもの

神製

おのののののののの

おのののののののの

源氏物語

ようぶのふんぼん

源氏

ようぶのふんぼん

おのののののののの

和泉武部

ありあけのひかり

あけのひかり

あけのひかり

ありあけのひかり

あけのひかり

源氏物語

九拾七

あけのひかり

あけのひかり

あけのひかり

あけのひかり

あけのひかり

あけのひかり

あけのひかり

あけのひかり

あけのひかり

源氏物語

あけのひかり

あけのひかり

あけのひかり

あけのひかり

あけのひかり

あけのひかり

あけのひかり

萩のやまのやまを
凡情ありけり後
あつらひや

三条小左衛門

贈従三位秋子女房

あつらひや
いさよ

萩乃を人にあはれ
あつらひや

資江船長

はつらひや 三条小左衛門

あつらひや
萩乃を人にあはれ

こんとあはれ
あつらひや

信保實相

萩のやまのやまを

あつらひや
あつらひや

あつらひや
あつらひや

萩乃を人にあはれ
あつらひや

花山院弁合

あつらひや

萩乃を人にあはれ

あつらひや

あつらひや

あつらひや

揚屋の徳田盛女

大納言経信母

あつらひや

あめくの人しきく
何うのり一物字あり
まきしんるわくよ物言
まきる秋乃西里思さ
ひしさをれいりふ人
あまてんとも

あめくの人しきく
まのおしきまきる秋乃やまてん

後拾遺和歌集

後拾遺和歌集第五

秋下

永承四年内裏并合し持衣とよみ

侍り

中納言資總

中納言顯基子

わく衣あまきよき
あまのわきうらま
ゆふのしむすく明
すくし朗詠八月九
月正長夜ふき
志無止時自承天

わく衣あまきよき
わきまきくわくもわくしけり
わきまきくわくもわくしけり

伊勢大補

やまのけく衣き
八重云きうらつ衣
くうつし後難は衣
うらつ衣とけり

やまのけく衣き
うらつ衣とけり

前廣徳中納言兼隆子
藤原兼房朝臣

あつたにふりてく
うらなふよや
はたに東きつふく
乃きしきく成
すのね乃ま
若乃根のま
月小あそい
よまてねるよ
よめしき
秋のまを月
ね人のよ

うらなふよや
まのま
花山院舟よ
つら
すのね人の
選子内教
十月あ
人
か

月ひりて
秋のまを月
ね人のよ

月ひりて
あつたにふりてく
うらなふよや
はたに東きつふく
乃きしきく成
すのね乃ま
若乃根のま
月小あそい
よまてねるよ
よめしき
秋のまを月
ね人のよ

古大無通後

いふれいふまのなればいふちを乃
秋いふれいふれいふいふいふ

あひまは信持たる人あつちては
すのきの菊をいふくよめら

あまのつゆ

ういふまのつゆいふあつて兼乃花
そのまひいふちういふけりりり

中納言定頼かれくよあり信持るふ
菊花のつゆいふけりりいふ

いふれいふまのなれば

母本山あはせいふ
ういふまのつゆいふ

いふり母本をいふ
いふり母本をいふこれ
きりりいふいふいふ
花をいふの気いふ

よめら

ういふまのつゆいふ
あまのつゆ

菊花のつゆいふ
いふいふのつゆ

大武三位

いふりいふりいふりいふりいふり
いふりいふりいふりいふりいふり

上東門院菊合せとせはりりいふ
乃ちういふいふいふいふいふ

伊勢大輔

いふりいふりいふりいふりいふり
いふりいふりいふりいふりいふり

菅原義忠朝臣

いふりいふりいふりいふりいふり
いふりいふりいふりいふりいふり

いふりいふりいふりいふり

いふりいふりいふりいふり
いふりいふりいふりいふり

いふりいふりいふりいふり
いふりいふりいふりいふり

菊合 ともま合あて

いふりいふりいふりいふり
いふりいふりいふりいふり

いふりいふりいふりいふり
いふりいふりいふりいふり

惟神の事人々よ
らうとてし若徒
心と神の御心を
みまうとてし
志しき人のうら
心海世古今著聞の刑
に教兼えむあり
アを心方足れと
一ともしいねと
心く信は感
刑ははゆるが
根信くおせの内
あは白菊の御
るこしと衣られ
かたひて人

しんよは侍る人乃と小男
こよ城はなれ九月にりよ菊の
つらひく侍るをんく侍る

良選法師

志しき乃ちつらひく侍る
か志はしこつらひく侍る
相模と資よ三とましくはなれ家
よまたりたふうつらひく侍る菊の侍
なれよめ。藤原経衛
うまきし人乃ち三とましく侍る

かきつこく格め
とこしこくを
お方おのを
うまきし人の
公資よ
我のやう
みまうつら
はなれハ
うつら
つらひく
お兼を 九月はの菊

花より乃ちつらひく侍る
みまうつらひく侍る侍る菊の侍
すまじはし菊を
おのやう
お兼を 九月はの菊
中納言定頼
永承四年内裏舞合よお兼を
よめ。中納言資總
お兼を乃ちつらひく侍る侍る菊の侍

あつらふもあやう
いふまゝにふまゝに
あつらふもあやう
あつらふもあやう
あつらふもあやう
あつらふもあやう
あつらふもあやう
あつらふもあやう
あつらふもあやう
あつらふもあやう

あつらふもあやう
あつらふもあやう
あつらふもあやう
あつらふもあやう
あつらふもあやう
あつらふもあやう
あつらふもあやう
あつらふもあやう
あつらふもあやう
あつらふもあやう

あつらふもあやう
あつらふもあやう
あつらふもあやう
あつらふもあやう
あつらふもあやう
あつらふもあやう
あつらふもあやう
あつらふもあやう
あつらふもあやう
あつらふもあやう

あつらふもあやう
あつらふもあやう
あつらふもあやう
あつらふもあやう
あつらふもあやう
あつらふもあやう
あつらふもあやう
あつらふもあやう
あつらふもあやう
あつらふもあやう

秋はくちかきわたり
心懐は撰別れ
まの限乃きあめりた
雪よきかきくも
りしははる人こころ
を人の心をいかに
いふれ秋のうきうき
いとわづらひきき
か滞るる
よもすうらりり
秋をいかにいかに
るる也

秋はくちかきわたりとあるは
出れりきとありうらり
九月五日伊勢大橋
くちかきわたりとあり
大武資通 從三位源朝臣
くちはる人こころいかに
くちかきわたりとあり
九月晦夜よき
源兼長 侍従
くちかきわたりとあり
くちかきわたりとあり

存於五 九歌

おちばはるる
あせまの心をせ
とこいれ
あせまの心をせ
うたねをいれ
とこいれ
のふい
秋はくちかきわたり

後拾遺和歌集第六
冬
十月乃はるる
とも大井の
つるふよめ
おちばはるる
あせまの心をせ
十月はるる
とよめ
大信
秋はくちかきわたり

其後寸奇の讀當
座不敬焉其後又
各詣住吉同祈請
夢示云秀奇の讀
非彼落葉奇哉
其後秀逸の由謳
奇又其身六位之時
矢云も明き所を
りち地さるるの時
心の明し
祚す月ねさめよ
心明し
何らちたのち
みまよあやせ
文選蜀都賦云見

こす乃ろろのさか
十月ともちよ山
下よめ
祚す月ねさめよ
あ〜乃ろろの本
空路も〜何らち
ろろ
何らちたのち
ろろあ〜ろろ
空路も〜何らち
何らちたのち
ろろあ〜ろろ
空路も〜何らち

錦雲成濯色江波
あ〜心も思しぬ
もあられよる
奥後物魚鱗乃
ら川のさや
細代いこやれ
る〜心も思しぬ
りよて日を
少魚をろろ
故原孝名
赤尾尉孝名
色まのね
氣まのね
集の
とて今後

あ〜心も思しぬ
うち川乃もや
あ〜心も思しぬ
後細代長
とよみ
故原孝名
あ〜心も思しぬ
うち川乃もや
あ〜心も思しぬ
後細代長
とよみ
故原孝名
あ〜心も思しぬ
うち川乃もや
あ〜心も思しぬ
後細代長
とよみ
故原孝名

中宮内侍 御意有家女

故原孝名 従五位下 長門守直家

永承四年丙申年合子

芳はれぬあやの川原
何野は讃岐阿野郡
香にり東風さわか
とこまよふと初ん
とこ川にり香れ中

あせあせおな
とこ川にり香

とこ川にり香
今序はあゆの心
燦りてふとこ川
とこ川にり香
とこ川にり香

上子竹
橋の古火

とこ川にり香
とこ川にり香

とこ川

あせあせおな
とこ川にり香

とこ川にり香

とこ川にり香
あせあせおな
とこ川にり香

とこ川にり香

あせあせおな
とこ川にり香

とこ川にり香
あせあせおな
とこ川にり香

大判の位

とこ川にり香

とこ川にり香

とこ川にり香

とこ川にり香

とこ川にり香

とこ川にり香

とこ川にり香

とこ川にり香

とこ川にり香

と童童のあつり
いもたぐくあせつり
とつるを合せつり
一説をなすつり
つりつりつりつり
つりつり

萩とつりつりつり
あつりつりつり
あつりつりつり
くつりつりつり
つりつりつりつり
つりつりつりつり

つりつりつりつり

つりつりつりつり
つりつりつりつり

律師長瀬 長瀬
東山信

萩とつりつりつり
あつりつりつり

屏風乃終つり
のつりつりつり

大申長徳宣明

萩とつりつりつり

は拾六

つりつりつりつり
あつりつりつり
あつりつりつり
あつりつりつり
あつりつりつり
あつりつりつり
あつりつりつり
あつりつりつり
あつりつりつり
あつりつりつり

あつりつりつり

萩のつりつり
母は信

萩とつりつりつり

あつりつりつり

萩のつりつり

あつりつりつり

あつりつりつり

あつりつりつり

あつりつりつり

萩乃板をま

白明し何事のり
くさくさ
よふ人
ては
心ゆくこもれり
千や
よふ人の
や
大原
埋火の
心ゆく

か
山
よふ人
さ
永
雪
千や
よふ人
埋火
う

ふ六

此火應鎖花
来終夜有春情
深殿

あ
陸
や
式
て
甲
あ

ら
う
松上
よ
藤原

あ
ひ
陸
か
紀伊
上
あ

春やうる人やとまき
女乃うち極めしと
さひやうく後りせん
唯

道雅三位乃八条北

お三は

雪のふりたるまき
雪のふりたるまき
人のかねし
さしはあまうと
にやわくしよあわ

依家母子よは八条の家
乃後子の哥ら撰目
経衛ははせし

けさやまらと乃雪をあらわく

道雅三位乃八条乃家北後子

山里乃雪乃何しとらうと

あまをよめ

菅原経衛

雪のふりたるまき

わさ下りたるまき

原家期長

やまらと乃雪

さしはあまうと

正拾六 七

哥人乃粉り入るる遺恨あると
なれの名籍をまつせんと
ふ糸向せに寝殿うか
とら下りくもけの家
はき人こさわり
とら下りくもけの家
すく心すれり

なれの名籍をまつせんと
ふ糸向せに寝殿うか
とら下りくもけの家
はき人こさわり
とら下りくもけの家
すく心すれり

なれの名籍をまつせんと
ふ糸向せに寝殿うか
とら下りくもけの家
はき人こさわり
とら下りくもけの家
すく心すれり

なれの名籍をまつせんと
ふ糸向せに寝殿うか
とら下りくもけの家
はき人こさわり
とら下りくもけの家
すく心すれり

なれの名籍をまつせんと
ふ糸向せに寝殿うか
とら下りくもけの家
はき人こさわり
とら下りくもけの家
すく心すれり

なれの名籍をまつせんと
ふ糸向せに寝殿うか
とら下りくもけの家
はき人こさわり
とら下りくもけの家
すく心すれり

なれの名籍をまつせんと
ふ糸向せに寝殿うか
とら下りくもけの家
はき人こさわり
とら下りくもけの家
すく心すれり

なれの名籍をまつせんと
ふ糸向せに寝殿うか
とら下りくもけの家
はき人こさわり
とら下りくもけの家
すく心すれり

なれの名籍をまつせんと
ふ糸向せに寝殿うか
とら下りくもけの家
はき人こさわり
とら下りくもけの家
すく心すれり

なれの名籍をまつせんと
ふ糸向せに寝殿うか
とら下りくもけの家
はき人こさわり
とら下りくもけの家
すく心すれり

信寂 尾経の言階助
順子 俗名母後子
四位上俊平 作者孫
なれの名籍をまつせんと

なれの名籍をまつせんと
ふ糸向せに寝殿うか
とら下りくもけの家
はき人こさわり
とら下りくもけの家
すく心すれり

雪の降りてはるるも
人の心もさるる梅の
つらや雪のふりしは
まじりてはるる梅の
こぼれはるるもさるる
まじりてはるる梅の
つらや雪のふりしは
まじりてはるる梅の
こぼれはるるもさるる
まじりてはるる梅の

しるるも
こぼれはるるも
おぼれはるるも
天曆乃は時沖屏向の
十二月雪のふりしは
法原元捕
わらわはるるもさるる
こぼれはるるも
雪のふりしはるるも
おぼれはるるも

雪の降りてはるるも
人の心もさるる梅の
つらや雪のふりしは
まじりてはるる梅の
こぼれはるるもさるる
まじりてはるる梅の
つらや雪のふりしは
まじりてはるる梅の
こぼれはるるもさるる
まじりてはるる梅の

おぼれはるるも
雪のふりしはるるも
おぼれはるるも
お大納言
雪のふりしはるるも
おぼれはるるも
お大納言
雪のふりしはるるも
おぼれはるるも
お大納言

とひあをむし
くしハナリシガ
ねハ童蒙抄云う
若しあはれは
云しとひあをむ
るり信のむし
魚入りカ
さよあをむし
祇園寺のむし
ゆきとあをむ
中ねあをむ
備後のは
さくわゆ
かめさう
若しあをむ

とひあをむし
戸向のむし
野志
はあをむし
ことをさくわ
道長
入道前大臣乃
あをむし
僧部長
おめさう
こやの池

まじり
こつり猪名野
陽池皆は
いそ
岩乃れ
いそ
うし
原の他
持は
あをむ
まじり
も

野志
いそ
あをむし
うし
まじり
後三条院
まじり
清行
あをむし

心明し拾遺刺ぬ
こころの心をさす
あまの心をたゆま
はるかにけきは
よめるやうに
雲をうらぐし
おねあまの平妻信女
子やこころと
しみる心明し

わりあまの心はさす
十二月晦日ころはあまの心
あまの心はさす

源おきおき

子やこころと
あまの心はさす

